



黒いパン

原作・アナトール・フランス
 脚色・長崎源之助
 画・吉崎正己
 制作・株式会社教育画劇

(1)

見てください、この紳士のうれしそう
 な顔を。この人は、ニコラ・ネルリという
 銀行家です。この国一ばんのお金持ちで
 す。みんなに お金をかして、もうけてい
 るのです。ネルリは、お札をかぞえるの
 が何より好きです。

(ぬ く)

黒いパン

1991年2月1日印刷発行© (16画面・不許複製)

編集兼発行者 升川和雄
 印刷所 株式会社あかね印刷工芸社
 発行所 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17-15
 株式会社教育画劇
 (振替) 東京5-29855
 電話 03(3341)3400
 FAX 03(3341)8365

演出ノート
 語りかける
 ように



ネ
ル
リ

「ほら、あの教会も、あの病院も、それ
 から、あの学校も、みんな わしが 寄
 付したもんじゃ。」

とくいげに

紳
士

へっらって

ネ
ル
リ

「やあ、たいしたもんでございますなあ。
 わたしは、ネルリさんのように ごりっ
 ぱな方を 知りませんよ。」

とくいげに

紳
士

「ははは、それほどでもないが。ほんの
 信心のしるしさ。」

ネ
ル
リ

「どうしてどうして、なかなかできない
 ことでございます。」

ネ
ル
リ

「それじゃあ、死んだら 天国へ 行け
 るかな。わっははは。」

(ぬ く)



女 男

(3)

「ほら、あれが 銀行家の ネルリさんだよ。」
 「まあ、えらい人は、見ただけでもわかるわね。」

ひとびとの ささやきを ききながら、
 ネルリは、とくいになって、胸をはって
 あるいていきました。

(ぬきながら)

家の門のところを きますと、こじきがいっぱい います。

ささやき声

| | |
|------------------------------|---|
| <p>黒いパン 解説・筑波大付属小教諭 石山忠造</p> | |
| 作品解説 | <p>この国第一等の金持ち(銀行家)、ニコラ・ネルリの寓話である。ネルリは、学校・病院・教会などを寄付して、町の人々から尊敬を集めているかに見えたが、門前ならばこじきには人間扱いをしなかった。死んだ彼は、神の前でさばきをうけた。学校・病院・教会などを寄付するためには、ひどい金もうけをした罰があるという。こじきに投げ捨てた黒パンだけが本物だとして、地上に追いかえられる。彼は、地上に戻ってから、名もなき人々に奉仕して、幸福をかちとった。</p> |
| ねらい | <p>主題は、「誠実」にある。他の言葉で表現するなら「ヒューマニズムの実践」ということであろう。この紙芝居は、角度を変えればいろいろな徳目をとることができるが、ここでは、「誠実」と「博愛」を加味したテーマでおさえるほうがいい。</p> |
| 指導の大要 | <ul style="list-style-type: none"> ○この物語は、大きく四つに分けることができる。そして、その四つにふくむ意味はそれぞれに深い。そこで、黒板に書くか印刷して配布するかして、四部分の意味をしっかりとおさえるようにさせる。 ○第一、第二の部分は、それぞれ意味をもちながら、第三部分の前段になっているから、さらりと指導するがよい。第三部分の話し合いは、念入りに行なうように注意する。 ○学校・病院・教会などを寄付するのに使った金は、正しくもうけたものでないこと。こじきに投げ捨てた黒パンは、尊い金で買ったものであること。この話の底流にある根本精神をしっかりわからせるように話し合う。 ○この紙芝居の内容は、深く考えすぎると児童にもわからなくなってしまうから、さらりと指導したほうがよい。 |
| 指導上の留意点 | <p>この種の紙芝居の場合は、原文につきあたり、深く味わいながら読むということを通すことによってわからせて行く必要がある。そうでなければ、少なくとも二回は見せなければならない。</p> |



(4)

こじき一 「だんなさま、おめぐみください。」

こじき二 「どうか、パンをひときれください。」

こじきたちは、口ぐちに あわれな声こゑを
はりあげて、ネルリのほうに きたない手
を さしだしました。

ネルリ 「うるさい。どけどけ！」

と、ネルリは となりました。

(ぬきながら)

そして、こじきたちを おしのけて、家いえ
にはいろうとしました。

あわれっほ
い声こゑで

となり声こゑ



(5)

こじき一
 "ニ
 ネルリ
 こじき三
 ネルリ

「そう おっしやらずに、おめぐみを。
 「どうぞ、だんなさま。
 「うるさい。どけといったら どけ！
 「たったひときれのパンでいいんです。
 「きたない。そばへよるな！」

(ぬきながら)

そういつて、ネルリは 石をひろって、
 投げつけようと思いました。

弱々しい声
 と激しい声
 なるに
 的対照



そのとき、召使いが、馬小屋や台所で
 はたらく男たちにたべさせる黒パンを
 いたたかごを、頭にのせてとおりかかり
 ました。

ネ
 ル
 リ

「おーい。こっちにこい！」

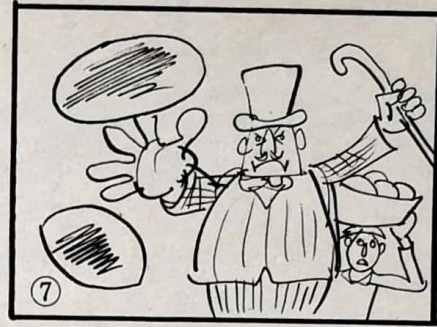
ネルリは、大声でよびかけました。

(ぬきながら)

ネルリは、かごから黒パンをつかみ
 だすと、

⑥

黒いパン



(7)

ネ
ル
リ

「こいつら、これでもくらって、とつ
と行け！」

と投げつけました。

わーっと、こじきたちは、声をあげて—

(ぬきながら)

黒パンを あらそって、ひろいました。

軽べつして

7

黒いパン



(8)

こじきたち

「うむ、こりゃあ、うまい！」

こじきたちは、おおよろこびで、黒^{くろ}パン

をむちゆうでたべました。

こじきたち

「うまい、うまい！」

ムシヤムシヤ ムシヤムシヤ

(ぬ

く)

はずんだ声



(9)

ムシヤ ムシヤ

ネルリは、ビフテキ、やさいサラダ、とりの まるやき……と、つぎからつぎから、ごちそうを、もりもりたべました。

ネルリ

「あんな まずい黒パンを ががつくって よろこんでいるなんて、あわれなやつらだ。」

(ぬきながら)

そういって、酒をのみのみ、たくさんたべて、ベッドにはいりました。

ところが――

いかにも軽べつしたよ
うに



(10)

ネ
ル
リ
召
使
い

「うーん、く、くるしい！」

「だんなさま、だんなさま、だんなさま

！」

召使いは、ネルリのからだを ゆすりま

したが、

(ぬきながら)

ネルリは、死んでしまいました。

だんだん
声で



(11)

死んだネルリは、神さまの前に やって
きました。

神さま 「ニコラ・ネルリよ。このはかりを 見
るがいい。こちらの さがっているほう
には、おまえが、ひとびとから だまし
とった金や、ほうりつを やぶって た
めた金がのっかっているのだ。」

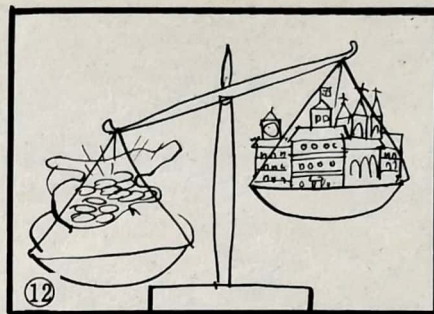
ネルリ 「ああ神さま、おねがいです。わたしの
信心深さを あらわした 教会や 病院
や 学校も、どうぞ、もう一方の皿へ
おのせください。」

(ぬきながら)

そこで 神さまは、ネルリのいうとおり
にしました。

語りの調子
をかえて

威厳をもつ
て



(12)

だが、金をつんだほうの皿は、すこしも
もちあがりませんでした。

神さま 「どうだね、ニコラ・ネルリ。」

ネルリ 「神さま、そのはかりは くるつてい

るではありませんか。病院や 教会や

学校が、そんなに 軽いなんて、とても

考えられません。」

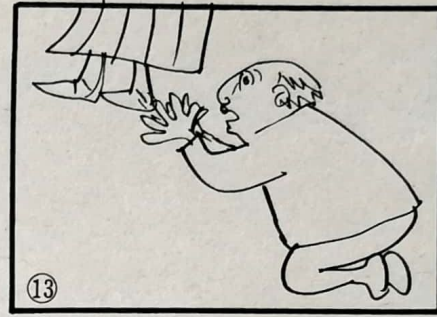
神さま 「神のはかりに くるいなぞない。おま

えの罪の重さを 知るがいい。」

に ふまんそ

重々しく

(ぬ く)



ネ
ル
リ

(13)

「では、わたしは、地獄じごくに行いかなければ
ならないのでしょうか。ああ、神かみさま
おねがいです。どうぞ、わたしを お助たす
けください！」
ネルリは、泣なき出だしてしまいました。

(ぬ く)

泣なき声こゑで



神さま

「あわてることはない。まだ、すっかり
 おわったわけではないんだ。ほら、この
 黒パンがのこっている。おまえが
 死ぬまえに、こじきたちに 投げ与えた
 パンだ。」

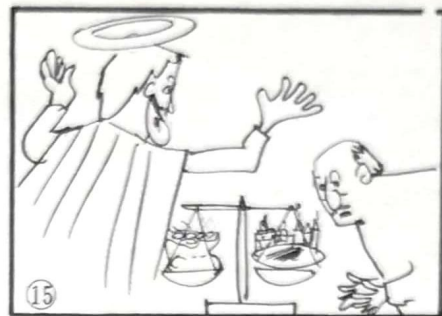
ネルリ

「そんな 黒いパンなんか……、ああ、
 わたしは、もうだめだ！」

(ぬきながら)

神さまは、黒パンを よいことをしたほ
 うの皿に おのせになりました。
 すると、どうでしょう。

うめき声に
近い感じて



(15)

ネルリ

「あつ、はかりが たいらになった！」
 ネルリは、びっくりして さげびました。
 神さまは、にこやかに 笑いながら、お
 っしやいました。

びっくりし
た声

神さま

「ニコラ・ネルリ、おまえは 天国にも、
 地獄にも 行くことはできない。もう一
 度 地上にかえるがよい。そして、この
 黒パンを 国じゅうに ふやすのだ。」

さどすよう
な調子で

(ぬ く)



(16)

さて、生きかえったニコラ・ネルリは、
 まずしいひとびとのために、いっしょう
 けんめい つくしたということです。

ほら、ごらんなさい。こんな そまつな
 服かぎを きているけど、ニコラ・ネルリの、
 このまんぞくそうな笑顔えがほを。

お
わ
り